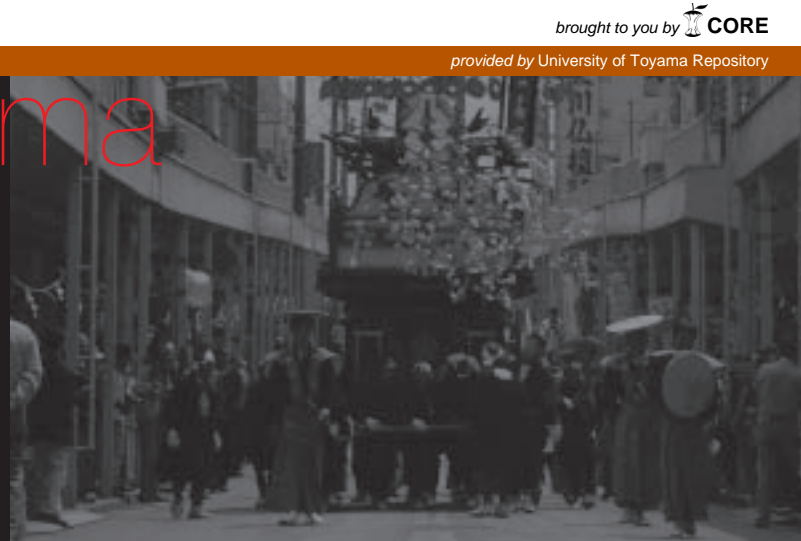


# Mikurumayama project

高岡二番町

## 御車山車輪復元修復

富山大学芸術文化学部教授 林 暁

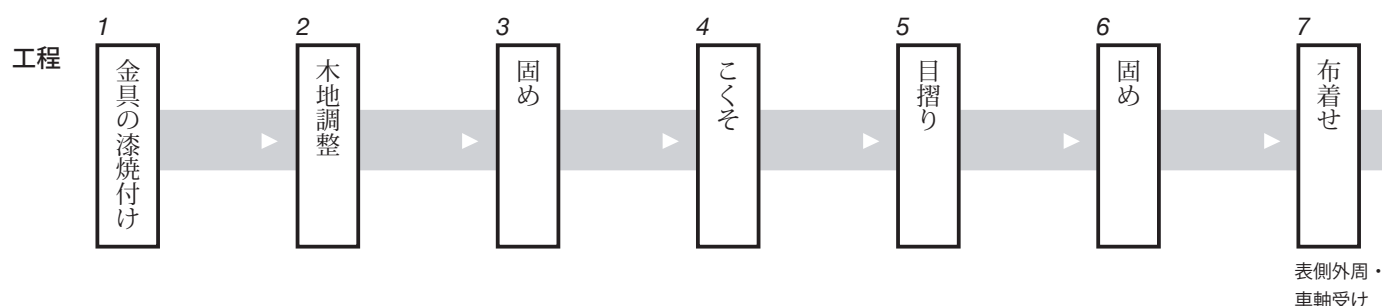


平成十九年春に国の重要有形・無形民俗文化財である二番町御車山の車輪復元修復における漆作業工程においての監修及び作業工程記録作成の依頼を、高岡市文化財課から受けた。平成十七年に高岡短期大学が旧富山大学と再編統合し、この地に富山大学芸術文化学部が創設されたことにより、芸術文化の面からより地域に貢献できる大学の在り方が求められている中で、私共の持つ技術や専門性が少しでもお役にたてばという思いでお引き受けすることにした。

桃山時代に太閤秀吉から加賀藩主前田利長が拝領したと

され、四百年に亘って高岡市民に親しまれた御車山の中でも、この二番町のもは二つの大きな車輪が特徴の最も古い曳山で、当時の卓越した木工芸・漆芸・金属工芸の各技術によって形作られており、歴史的な文化財としての価値も高く評価されている。

二番町自治会の皆様の期待はもちろんのこと、高岡市や国がバックアップするこの事業の重要な工程の監修を引き受けるにあたっては、大きな責任を負うことになり身の引き締まる思いであったが、現在考えられる最善の技術と材料を用いて、できるだけ良い結果が残せるように、復元修



車輪用作業台に固定し、人力で押して隣室である作業場に搬入。

《作業台について》

車軸穴に嵌めて固定できるため、作業台の一部が車軸の役目を果たして、車輪を浮かせた状態での設置が可能な可動式作業台。車輪を回転させる事も可能。作業によって車輪を垂直から水平の間で傾ける事も出来る。高岡市内で鉄工所を営まれている坂井氏の協力により二台製作された。



布は、素地の木が動いて亀裂が生じたときに布ごととはがれて損傷が目立つことを防ぐため、木地の継ぎ目で正確に継ぎ合わせ8分割している。このために作業を二日に分けて4枚を一枚おきに貼る。

篋で糊漆を配り、刷毛で均一に塗布する。布の端を素地と鉄輪との隙間に4mmほど竹篋で押し込む。布を刷毛や篋で押さえる。特に凹面に貼った布は浮きやすいので引っ張らない様にする。その後、上から糊漆を配り布目に埋め込んでいく。余分な糊漆は取り除く。



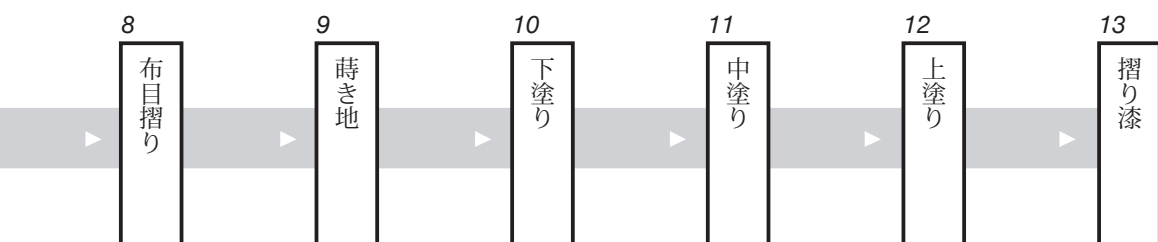
制作監修：富山大学芸術文化学部教授 林 暁  
 制作者：祭屋台等製作修理技術者会 内島 正雄 木津 繁治  
 制作助手：富山大学 専攻科1年 浅見 惟 斎藤 翔太  
 芸術文化学部2年 新谷 仁美 竹内 耕祐  
 記録補佐：富山大学 専攻科1年 植埜 貴子  
 期間：開始 平成19年8月4日  
 終了 平成19年11月26日

復にあたった全員で努めた。車輪一つの重量は350キロ以上ということで安全性や作業性を考慮して、市内で鉄工所を経営する坂井正樹氏の協力のもと、一つの車輪に一つずつ計2台の専用に設計した架台を制作した。漆塗りの作業は、富山大学高岡キャンパス構内で、地元漆芸家の内島正雄氏と 木津繁治氏が中心になって行い、漆工芸を学んでいる学生数名が助手を務めた。学生が、熟達した漆工芸技術を真近くで見ることができ、その仕事を学べることは、このような機会であって得られない経験であり、今回得た大きな成果の一つであった。

先祖が守り育んできた文化を継承し後世に伝えていく事の大切さを、御車山にかかわる全て人々が、大きな誇りと地域の絆を肌で感じ再確認できることによって知ることができる。若い学生たちが作業の助手を務め、完成までのプロセスを体験できたことも次の時代につなぐための重要な成果だった。

これから銚金具の修理が施され、新装なった二番町の曳山として披露される日が楽しみである。この

事業の監修をさせていただいたことを高岡市民として誇らしく思うと同時に、お力添えをいただいた方々にこの場をお借りしてお礼申し上げます。



表側外周・  
車軸受け

表側前面・  
車軸受け・  
矢骨側面



10 下地付け・砥ぎ

多くの下地法の中で、蒔き地法は硬度や対摩耗性が高くもっとも信頼できるものと考え、手間がかかるものではあるがこの仕事に採用することにした。

裏側に中塗りしている様子隅に漆が溜まらない事や厚みに注意して、3、4種類の漆刷毛を使い分けながら塗る。



上塗りは、制作者の内島氏が担当して行った。裏側の目弾き部分と複雑な作業を要する部分は両氏が協力して行った。「塗り立て」で仕上げるため、上塗りの仕上がりがそのまま車輪の表面になるので、なるべく塵の無い塗面に仕上げる必要がある。部屋を密閉し、埃の立たないナイロン製の衣服を着て作業をする。塗りあげた塗面に塵が落ちている場合は、鳥の羽根の軸を鋭く切った先で塵をすくい上げて取り除く。他の面に漆が付いてしまった部分は、水牛の角篋で残さず取り除く。

